

六月のテーマ

親の子、子の親



え・城谷俊也

親の思いを 知ることから

倫 理研究所では、一都一府九
県で「後継者倫理塾」を開
催しています。

その目的は、「創業者の精神を引
き継ぎ、倫理経営を正しく理解・
実践し、健全な企業経営を推進す
る後継者の育成を図ること」、そし
て「倫理法人会活動を通して、人
間力を培い、地域発展に寄与する
人材を養成すること」です。毎年、
多くの企業がこの目的に賛同し、
後継者を派遣しています。

経営者の希望により派遣され、
最初は仕方なく参加した後継者も、
十カ月にあぶカリキュラムを通し
て、企業の後継者としての覚悟を
固め、塾の修了と共に新たなスタ
ートを切ります。

Mさんも、その一人です。父親
が経営する飲食店で働く中で、後
継者倫理塾に派遣されました。

その飲食店は、四代続く老舗で
す。Mさんは、幼い頃から後継者
として育てられました。最初から
決められたルールが敷かれている
ようで、自分の人生に嫌気がさし
ていたMさんにとって、後継者倫

理塾への参加は苦痛でしかありま
せんでした。

それでも、その不満は心の奥底
に隠して、表面を取り繕い、ただ
ただ塾の修了を待ちました。

いよいよ塾の修了式の日。後継
者としての決意を述べたら、塾も
終わりだ。適当にうまいことを言
って終わろう。やっとこの苦痛か
ら解放される」という思いで、演
台に立ちました。

演台に立つと、真つ先に視界に
入ったのが両親でした。〈俺は自分
の人生を思うように生きたい。な
ぜ俺は後継者なんだ!〉という積
年の思いが込み上げてきましたが、
父の姿を見ていると、なぜか涙が
溢れてきました。そして、これま
で考えたことがなかった感情が心
の内に湧き上がってきたのです。

〈そういえば親父も後継者だっ
たな……。親父はどんな思いで、
会社を継いだのだろうか。そして、
どう思うかで、自分にこの会社
を引き継ごうとしているのだろうか。
この塾に派遣してくれたというこ
とは、親父はもちろん自分に受け

継いでほしいと思っっているのだろ
うな……。〉

そう思った瞬間、Mさんは思わ
ず「四代続く我が社を受け継ぎ、
後世に残していきます。そして、
先代をはじめとする、歴代の経営
者が誇れる企業にします!」と誓
っていたのです。Mさんの決意を
聞き、会場は拍手の渦に包まれ、
両親は笑顔で見つめていました。

その後、Mさんは決意通り、経
営者として一本立ちができるよう
仕事に邁進し、倫理経営の学びを
深めています。そして、いつか我
が子が誕生した時には、自ら継ぎ
たいといわれるような企業を目指
しています。

親子といっても、その生き方、
考え方に違いがあるのは当然でし
よう。親の希望と子の希望が異な
る場合も多々あります。

たとえ異なっている、子の立
場としては、頭からそれを否定す
るのではなく、まずは親の心を理
解しようとするところから、本当
の意味で自らの人生を作り上げて
いく一歩が始まるのです。